
花と小鳥と半分の魔王

鷹村柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花と小鳥と半分の魔王

【Nコード】

N4844P

【作者名】

鷹村柚希

【あらすじ】

その青年と少女が出会ったのは、全く知らない異世界だった――
I。

魔王の役目を持つ青年アオイと、魔王の力を持つ少女カナリアの魔界生活奮闘記（多分）。人間であることを隠しつつ、二人は魔界で何を成すのか。頭脳ならチートなアオイと戦闘力なら無双なカナリアは、魔界や人間界の面倒事に巻き込まれながらも、周囲を振り回しつつマイペースに生きて行く。多分そんなお話。きっとそんなお話。不定期更新ですが、よろしく願います。 2 / 15

あらすじとキーワードを変更、及び全体的にリニューアルいたしました。

■プロローグ・神と魔王

「ねえ、ちょっといいですか？」

「なんぞや」

「お願いがあるんですよ」

「おや、珍し。一体どうゆう気の迷いさね？」

「ちょっと貴方にしか頼めそうのないことだね。已^やむを得ずって感じですか」

「ふーん……まあそうは言われても、あんまり個人的な干渉は好まれないし、物によっちゃあ吞^のめない要求もあるんだけど？」

「そこを何とか。僕の、最後のお願いになると思いますから」

「最後まで君……てかそうゆう要求するつもりなの？」

「ええ、まあ」

「……………」

「……………」

「……用件はなんだ。魔王殿」

「後継者のことをね、お願いしたいんですよ」

「あー？そんなん自分で選びなさいよ」

「そうしたいのは山々なんですけどね。この世界の住民じゃあ、あまりいい結末は望めないでしょう」

「……………君は」

「ここではない別の世界から、魔王^僕の後継者になれそうな人材を探して連れて来てもらいたいんです」

「……………」

「ここ数万年で、人間と魔族の間での常識は確立されてしまった。人間と魔族が領土を結界で分け、真っ向から対立している。そしてそれを、誰も疑問に思わない」

「……………」

「その常識を崩してくれる、ここにはない発想を持った人材がこの世界には必要です」

「……………」

「お願いします。僕じゃもう無理なんです。このままじゃ、この世界はただ戦乱に沈むだけだ」

「……………」

「……………」

「…………どの世界においても、戦乱の世と化すことになんら不自然はない。実際、ここで私が手を貸さなきゃ君の世界は戦争ばかりになるだろうし、それがその世界の住民の手で避けられないようなら、それはその世界の運命^{さだめ}だ」

「……………」

「もちろん、私の手なら運命^{さだめ}の一つや二つ、それこそ簡単に変えられる。…………だけど、それは当然その世界の未来を捻じ曲げる行為だ」

「……………」

「……………君は本気？」

「……………はい」

「覚悟はある？」

「はい」

「君もただでは済まないよ？」

「わかっています」

「禁忌を犯すことに耐えられる？」

「はい」

「……………」

「……………」

「…………… わかったよ。君がそこまで言うんなら、その要求を呑もうじゃないか」

「…………… ありがとうございます」

「ただし、さっきも言った通り君もただじゃ済まないよ。私が他の世界の住人を別世界に移したことは何度かあるけど、それらはその世界の意思だった。でも今回は違う。世界の中のたった一ピースの選択で、世界の未来を捻じ曲げる」

「……………」

「願いを叶える代わりに奪われる対価の意味を知らなさい。君にその覚悟はあるね？」

「あります。例え魂まで全て消滅するのだとしても、この決意は揺るぎません」

「…………… いい返事だ。承ろっ、その要求を。対価は、命や魂までは奪^とらないであげる。今回は知人割引ってことで」

「ありがとうございます……対価の内容はなんですか？」

「君の行動、それから時間。君は今後一切、自分の手によって直接世界に影響を与えることができなくなる。それから、君は今ただでさえ体にガタが来て行動時間が減って来てるのだろうけど、今後はほぼ全く行動できなくなる。君の張った結界の維持の為に、ずっと眠り続けることになる」

「……はい」

「その代わり、人材は飛びっきりのを見つけてきてあげるよ。そこは安心して。それでも……君がその変わった結末を見れるとは限らないけれど」

「充分ですよ。こんな無茶苦茶な頼みに応えてくれただけで、感謝しきれませんから」

「気にしないでいいよ。……まあ、本来なら気にするべきなんだろうけど。それにしても、君との付き合いも随分と長い物になった私ね。神には時間と言う概念はないが、それでも長かったと感じるよ」

「そうですね……僕も貴方に会った当初は、こんなに長生きすることになるとは思いませんでしたよ」

「最初に会った時は君、五百七十三歳だったつけ。今いくつよ？」

「もう、覚えてませんよ。十万にはなっていないことは確かですが、八万ぐらいですかねえ」

「マジかよ、そりゃ長いはずだ。人間にも魔族にも、長過ぎる時間

だよ」

「でしようね」

「ねー……さて、そうと決まれば早いとこ魔界くに帰りな。身の回りの整理とかあるでしょ。きちんと周りに説明して、これでいいってなったら眠りなさい。そしたら契約が発動するから。ちなみに後継者送れるのは君が眠りについてから千年後だから。さすがにすぐには無理だから、そこんともちゃんと説明しといてね」

「わかりました。その通りにします」

「うん、素直でよろしい。……じゃあね、リオ。次君に会えるのは一体いつになるだろうか。それとも、もう二度と会えないのかもしれない」

「例え二度と会うことがなくとも、僕と貴方が出会った事実は変わらない。……お元気で、創造神クリエイターさん」

「
「
さあ
始めようか
「
「

□ 登場人物紹介 ネタバレ注意及び随時更新（前書き）

注意！！

この『登場人物紹介』はネタバレを多いに含むため、閲覧する際には充分ご注意ください。

物語が進むに連れて随時更新していきます。

『登場人物紹介』をご覧にならなくても本編には影響はありませんので、投稿分のストーリーを読み終わった後、おさらいといった形でお読みになるのが好ましいです。

以上、閲覧する場合は自己責任でよろしく願います。

お手数をおかけして大変申し訳ございません。

□登場人物紹介

ネタバレ注意及び随時更新

アオイ

本名：不詳 性別：男 年齢：22歳 身長：180? 職業：サラリーマン

初期装備：白のワイシャツ、黒のスーツ、黒の革靴、眼鏡、ビジネスバッグ、ブランド物のアナログ時計

女性として生まれていたら、さぞ重宝されていたであろう程のストリートな黒髪。目付きは割と普通。

何故か知りもしないはずのこの世界の知識がある。

しかし、所有している知識はこの世界の生態系や地理的なことに関するものばかりで、歴史や一般常識といったものが、一部を除いて全くない。

頭はキレるらしく、突然得たこの世界の知識を有効的に活用できているもよう。

困ったような表情が似合う。（カナリア談）

カナリア

本名：不詳 性別：女 年齢：17歳 身長：152? 職業：高校生

初期装備：紺チェックのプリーツスカート、ブルーの半袖のワイシャツ、リボン、黒のハイソックス、黒のローファー、通学鞆

ややツリ目の瞳に、黒髪のボブカット。

何故か魔王の力を所有している。

今のところ、身体の一部を変形させる能力を使用。

怪我の回復もできるが、体力までは回復させられないもよう。

あまり表情が表面に現れないが、決して感情が薄いわけではないようである。

可愛い。（アオイ談）

どうやら以前からアオイのことを知っている模様。

■ 一話・青年（前書き）

鷹村「……でね、次考えてる話なんだけどさ」

蘇芳「うん」

鷹「勇者が二人召喚されるって話よくあるじゃん。それでさ、二人召喚されるのは勇者じゃなくて魔王ってゆう話を考えてて云々」

蘇「ほうほう」

鷹「それでどっちが本物とかじゃなくて、二人がそれぞれ魔王の役目と魔王の力を持ってて、二人で一人みたいな云々」

蘇「うんうん」

鷹「どうよこれ」

蘇「ふむふむ……魔王が二人？」

鷹「うん」

蘇「二人は……まおキュア？」

鷹「違う!！」

こうしてこの小説は誕生しました。

（このやり取りは本編には関係ありません）

■ 一話・青年

side：青年

目の前の少女は、無表情で青年を見下ろして来る。

ややツリ目の瞳からはなんの感情も読み取ることができず、ボブカットの長さにカットされた黒髪は、時折吹く風に身を躍らせた。

服装からして、おそらく高校生だろう。

紺のチェックのプリーツスカートに、薄いブルーの半袖のワイシャツ。

襟元を飾るスカートと同色のリボンはきちんと上まで上げられ、極普通の少女を作り上げるソレは、夏用の制服と思われる。

何故青年が自分より身長の高いであろう少女に見下ろされているのかと言うと、情けないことに、現在彼が腰を抜かして地面にへたり込んでいるからである。

そんな青年に、少女は手を差し出した。

死んだのかと思った。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「

それぐらい、青年の目の前にある景色は非現実的だった。

夕焼けより少し暗い赤暗い空に、荒野を思わせる大地の先には、黒く影を落とす山か丘か。

——地獄があるなら、こんな風景なのだろうか。

思わずそんな感想が浮かんでしまうような景色だった。

自分が何故こんな場所にいいのか、青年には全く心当たりがない。

厳しい残暑が続く中、今日も変わらず会社に出向き、がむしゃらにデスクワークをして、サービス残業まできっちりこなし、ようやく帰路に着いたところだった。

ふと蒸し暑い空気に心地良い風が吹いて、青年はなんとなく目を閉じた。

そして再び目を開いた時には、すでにこの場所にいた。

先程までの昼夜無関係の騒がしさや、人工的な光で隠された夜空はそこにはなく、存在するのはただ悪戯に不安感を煽るような、現実味のない光景だった。

「……………え？」

突然の状況の変化に、思わずキョロキョロと辺りを見回す。だが、そこにあるのはどこまでも見知らぬ景色だけだった。

突然の出来事に、青年は困惑する。

試しに頬をつねってみるが、つねった箇所痛みを感じただけで目の前の景気が変わることはなかった。つまり、これは現実。

青年はまさに瞬きする程の間に、全く知りもしない場所に一人放り出されていたのである。

「参ったな……………」

明日は大事な会議があるから真っ直ぐ帰りたかったのに、と青年は呑気に考える。

しかし、どうやってここに来たのか心当たりすらないし、ここがどこかもわからない。

つまり帰りようがないのだ。

せめて何か手掛かりになる物はないかと再度周囲を見回してみるが、目欲しい物などありはしない。

スーツのポケットから携帯電話を取り出して開いてみるが、圏外になっていた。

一つ溜息をつき、鬱陶しく額を伝う汗を拭う。

脇に抱えたビジネスバッグとスーツの上着を抱え直し、青年は現状を打破すべく歩き出した。

ともかく人に会わなければどうしようもない。

ここがどこかも知りようがないし、何より生命の維持にも関わってくる。

食料らしい食料も持っていない。飲み水も飲みかけのペットボトルが鞆に入っているのみである。

こんなわけもわからない場所で干からびて死ぬのはごめんだった。

——とにかく歩こう。ずっと同じ場所にしても危ないし、もう少し歩くと森が見えるはず。森を越えたら一つ城があるはずだから、そこまでなんとか……

はた、と、青年は足を止める。

今自分は何を考えた？

青年は、数秒前の自分の思考を振り返る。

ずつと同じ場所にしても危ないし、もう少し歩くと森が見えるはず。森を越えたら一つ城があるはず。

何故、ずっと同じ場所にいると危ないのか？

何故、もう少し歩くと森が見えると確信できる？

何故、森を越えたら一つ城があると知っている？

何故？

ここには、今日初めて来た。

こんな場所は知らない。聞いたこともない。そもそもどうやって来たのかもわからない。

なら、何故知っている？

何故、 ここが 魔界 だと 知っている ？

青年は突然恐怖に苛まれた。

こんな場所に心当たりはない。ほんの少し前まで、確かにそう思っていた。

なのに、知っている。自分はここを知っている。

ずっと前から記憶にあつたかのように、それはしっかりと自分の知識として収まっていた。

蒸し暑さとは別の理由で、汗が頬を伝う。

あるはずのない知識。それはまるで、自分の記憶が自分のものではなくなるかのような恐怖。

突然今までなかった知識がついたように、突然自分を自分たらしめている記憶がなくなってしまったら？

気が付かないうちに、自分が書き換えられてしまったら？

負の思考は、自らの尾に喰らい付いた蛇のように無限に連鎖していく。

青年は、考えを振り払うかのように走り出した。

憶測に怯えていても仕方がない。

仕方がない、が、一度考え出すと止められないのが青年の困った癖だった。

だから、これ以上何も考えないよう、青年は走る。

程なくして前方に森らしき物が見えてきた。

青年はそのまま走り続け、躊躇いなく森に足を踏み入れる。

迷うだとか、そんな懸念は微塵もない。

別段迷わない自信があるわけではなく、これは単に勢いというものだった。

とは言え、元々スポーツの趣味などもなくデスクワークで鈍りまくった身体では、そう長いこと走っていられるはずもなく。

森へ入ってしばらく経たないうちに、青年の足は速度を落とし、や

がて止まった。

肩で息をしながら、鞆と上着を持っていない方の手を膝について呼吸を整える。

しばらくそうしていると、ようやく呼吸が静まってきた。

自分の運動不足を呪いつつ、青年はかけている眼鏡を外して目元を流れる汗を拭う。

そこで、ようやく気付いた。

数体の獣に囲まれていることに。

走っていて気が付かなかったようだ。
眼鏡をかけ直して、周囲の様子を窺う。

藍色の毛並みの狼のような見た目の獣が、唸り声を上げながら木々や茂みの陰から姿を現す。

その数、六体。

——この森に生息している魔物……自分達より魔力の低い者を嗅ぎ付けて襲う。以前は主に人間を襲っていた。今の僕の魔力は皆無に

等しい。おそらく、森に入った時から目を付けられて……

だからなんで知……てるんだ！！

またもや湧いて出てくるあるはずのない知識に、無理矢理思考を遮る。

ともかく、現在青年に勝算はない。

この獣達は連携によって攻撃してくる。

青年は武器らしい武器も持ち合わせておらず、しかもこんな少し走っただけで息が上がってしまうような運動神経では、この数の獣に太刀打ちするのは無謀どころか自ら死に行く以外の何ものでもない。

上手いこと逃げようにも相手がこの数では、不意打ちも目眩ましも大して意味を持たない。

勝算はない。だが、死にたくはなかった。

ならばどうする？

どうしようもないのか？

獣達が躍り上がる。

狙いは目の前の無力な青年。

獣の凶悪な牙は過たず青年の喉笛に喰らいつく――

――はずだった。

火薬が発火するような音と共に、目の前に迫っていた獣が吹き飛んだ。

「——ッ！」

二度目の爆音と共に、側頭部すれすれに何か飛んで行き、反射的に身を引こうとしてそのまま尻餅についてしまった。

三度目の爆音。

音と共に放たれた何かは、躊躇いなく獣達に襲い掛かる。

突然の出来事に獣達はパニックに陥り、悲鳴を上げながら散り散りに逃げ出して行った。

「あ……」

一瞬で逆転した状況に呆然と立ち上がれずにいると、ざり、と地面を踏みしめる音がした。

地面に座り込んだまま振り向くと、一つの人影が木の陰から現れた。

その人影は少女だった。

ややツリ目の瞳からはなんの感情も読み取ることができず、ボブカットの長さにカットされた黒髪は、時折吹く風に身を躍らせた。

服装からして、おそらく高校生だろう。

紺のチェックのプリーツスカートに、薄いブルーの半袖のワイシャツ。

襟元を飾るスカートと同色のリボンはきちんと上まで上げられ、極普通の少女を作り上げるソレは、夏用の制服と思われる。

そして少女の片腕には、黒光りする巨大な筒状の物が生えていた。

華奢な少女の腕は肘の下あたりで黒く変色し、筒の中腹に溶け込むように突き刺さっている。

その黒い筒状の物は、青年の知識にある物に当てはめれば、どこからどう見ても、所謂ロケットランチャーという物でしかなかった。もつとも、青年はロケットランチャーそのものを見たことは今までないのだが。

少女が軽く手を動かすと、獣の群れを追い払った黒い筒がずりりと解け、正常な人間の腕が現れる。

そして、今がした元に戻したばかりの白い手を、未だにへたり込んでいる青年に差し出した。

「……………」

青年は差し出された手を見、目の前の少女を見上げた。

少女と視線がかち合う。

一瞬睨みつけられているのかと錯覚するような、強過ぎる程強い光

を孕んだ瞳に、思わずたじろぐ。

少女はそんな青年を見て目を瞬くと、口を開いた。

「大丈夫ですか」

■ 一話・青年（後書き）

2 / 1 5 誤って削除してしまったため、上げ直しました。

■二話・少女

side：少女

少女は、無言で目の前の青年を見下ろした。

眼鏡のレンズ越しに覗く瞳は驚愕と困惑に揺れ、女性として生まれ
ていたならさぞ重宝されたであろう真っ直ぐな黒髪は、伝う汗によ
って額や首筋に所々張り付いている。

服装は極普通のサラリーマン。

両袖を捲り上げられたワイシャツには、クールビズなのかネクタイ
はなく、襟は第二ボタンまで開けられている。

すぐ横には黒いスーツの上着とビジネスバッグが落ちているが、お
そらく抱えていた物を落としたのだろう。

おそらくこの青年は少女より遥かに背が高いのであるが、現在青
年は地面に座り込む形になっているため、少女は自然と青年を見下
ろす形になる。

少女と、青年の視線が交わった。

青年が気圧されたように身を引いた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

少女は辺りを見回す。

目に入るのはひたすらに鬱蒼と茂る木々のみ。

上を見上げれば、夕暮れ時なのか枝葉の隙間から見える空は赤い。

「……………」

少女は首を傾げる。

先程まで少女は忘れ物を取りに高校に向かっていたはずで、時刻も夕方ではなく深夜に近かったはずだ。

もちろん、深夜に学校に向かったところで入れるわけではないのだが、少女は一階女子トイレの掃除当番がいい加減で窓の鍵をかけないことが多いことを知っているため、そこから入れるだろうと考えた。

不法侵入する気満々なわけなのだが、一応学校に行くのだからと律儀に制服を着込み、通学に使用している鞆を手に、少女は通っている高校へと向かった。

途中、補導されなかったのは奇跡と言えよう。

それはともかく、少女はこのような場所は知らない。

地元にもこのような鬱蒼とした森はないし、そもそもあったとしても、少女はつい先程まで駅構内にいたのだ。

それはあまりにも非現実的過ぎる出来事だった。

——これが噂に聞く“異世界トリップ”とやらだろうか。

少女は呑気にそんなことを考える。

“異世界トリップ”なんて物は、所詮架空の産物だ。
本気でそう思っているわけではない。

あまり現状に悲観しているわけではないようだが、あまり知らない
場所に一人でいるのは好ましくない。

かと言ってこのような迷ってくださいと言わんばかりの森の中を積
極的にうろつくのも正直気が進まない。

さて、どうしたものか。

とは言え、結局は歩き回らなければどうしようもないため、少女は
意を決して——という程でもないが、歩き始めた。

そうしてしばらく歩みを進めるが、周囲の景色に大した変化は見ら
れない。

ただひたすらに生い茂る木々。空は赤い。

途中、ふと思いついたように携帯電話を開いてみたが、当然のよう
に圏外だった。

少女はあっちへうろこっちへうろこ、森の中を黙々と歩き続
ける。

それなりに長い時間歩いている自覚はあったが、全く体力は減った様子はなかった。

ちらほら鳥や獣らしき気配は感じるが、別段襲い掛かってくることもなく、遠巻きにこちらの様子を窺っているだけのようだったため、少女はそれらを見捨て歩き続けた。

生息生物に襲われないのは好都合。
無駄に気を張ってなくて済む。

だが、しばらくそうしていて少女は気付いた。

いくらなんでもこれ程無防備に歩き回っていて、獣の一つにも襲われないのはおかしいのではないか？

いくらなんでもこれ程の間、華奢な少女が歩いていて息の一つも切れないのはおかしいのではないか？

実際、何かおかしいのではないか？

少女は周囲を見回す。

相変わらず、こちらの様子を窺う獣の気配を感じる。

そもそも、何故一介の女子高生が気配なんて読み取れる？

姿は見えない。彼らはこちらにバレまいと、息を殺し身動き一つせずこちらを様子を窺っているのだ。

何故様子を窺う必要がある？

武器も持たず無防備に歩く娘一人に、何をそこまで怯える必要がある？

答えを出す前に、思考を遮るように迫ってきた気配に、少女は思わずびくりと身を振るわせる。

様子を窺う以外の気配を感じるのは初めてだった上、その気配は走っているのか結構な速さで近づいてきたからだ。

その気配は人のものだった。

この場所で初めての人間。

少女は、そつと気配のする方向へ近付いて行く。

木の陰に隠れて様子を窺ってみると、気配の主は一人の青年のようだった。

青年は、身を屈めるようにして呼吸を整えている。

そして少女には、手に取るようにわかった。

青年が、数体の獣に囲まれていることに。

獣の数は全部で六体。

このままでは青年が危ない。

そう、危ない。

つまり、獣達は青年を襲おうとしているのだ。

イコール、その獣達は決して大人しい気質の持ち主ではない。

なら何故、少女を襲わない？

基本的に、この森に住む生物が大人しい生き物だというのなら、今まで少女が襲われなかったことには納得がいく。

だが、この光景はどうだ。

今まさに、自分となんら条件の変わらない人間が、獣の餌食になろうとしているではないか。

何故、少女は襲われなかった？

そんなこと、簡単なことだ。

少女の力が、魔王の物だからだ。

木々や茂みの陰から、獣達が姿を現す。

このままでは、青年は抵抗する間もなく喰い殺されるだろう。

だが少女は、どうすればいいのかわかっていた。

「……自分達の王の力に怯えるのは当然よね」

ずっと手にしていた通学鞆を地面に下ろし、顔の横に構えるように、右手を上げる。

見る間に右腕が黒く変色し、どろりと溶けた。形を崩した右腕は、別の形を作り上げていく。

イメージするのは——そう。

透明な瓶に液体を流し込むように、右腕に直結して黒光りする筒状の物が形作られる。

出来上がったのは所謂ロケットランチャーと呼ばれる兵器。もちろん、実物を見たことはないから漫画やゲームの知識から見よう見まねで造った物だ。

イメージとしては、某悪魔も泣くかも3に出てきたオッドアイの女性所持していたランチャーである。

意外にも、少女はそういった物を好む趣向があるようだった。

少女は腕から生えたそれを構える。

獲物は六体。

全て倒す必要はない。適当に脅かして散らせれば済む話だ。

ロックオン。

発射。

吐き出された凶悪な兵器は、躍り上がった獣を過^{あやま}たず捕らえ、吹き飛ばした。

続いて、背後から青年に飛び付こうとしていた奴らにも一撃。

かすったのか、青年が地面に身を投げ出したが、特に怪我はないようなのでここはスルーする。

三発目を放つ頃には、獣達は完全にパニックに陥り、散り散りに逃げ去って行った。

正直、こんな木々の混み合った森の中で本物のロケットランチャーなどをぶつ放せば、獣達は愚か少女も青年も無事では済まないのだが、爆発の具合を威嚇に必要な程度で設定したため、大した被害はなかった。

少女は構えを解き、木の陰から離れて青年に近付いた。

青年が座ったまま振り向く。

少女は無言で青年を見下ろした。

眼鏡のレンズ越しに覗く瞳は驚愕と困惑に揺れ、女性として生まれ

ていたならさぞ重宝されたであろう真っ直ぐな黒髪は、伝う汗によって額や首筋に所々張り付いている。

服装は極普通のサラリーマン。

両袖を捲り上げられたワイシャツには、クールビズなのかネクタイはなく、襟は第二ボタンまで開けられている。

すぐ横には黒いスーツの上着とビジネスバッグが落ちているが、おそらく抱えていた物を落としたのだろう。

少女は右腕を元に戻すと、そのままその手を青年に差し出した。

立ち上がるのに手を貸そうと思ったのだが、青年はその手を取ろうとしない。

とりあえず戸惑ってはいるのだろうなと思っていたと、目が合った。思わず探るような視線を向けてしまい、気圧されたように青年が身を引く。

「……大丈夫ですか？」

警戒を解いてもらえるよう、そう声をかけてみる。

「どこかお怪我は？」

「え、あつ、いや、大丈夫です」

声をかけられて驚いたのか、青年が挙動不審気味に返事をする。

「ならいいのですが……お手をどうぞ」

「……………すみません」

若干気不味そうに青年は少女の手を取り、立ち上がった。

青年は服に付いた埃を払い、地面に落ちている鞆と上着を拾う。

「ええと……助けただいて、ありがとうございます」

「いえ、お気になさらず。ご無事で何よりです」

今度は少女が青年を見上げる番だった。

少女の身長は152cmと、同じ年頃の女子達の中でも低い方である。

対して、青年の身長はおよそ180?程。

目分量で見積もっても二人の身長は30?近く差があるわけで、少女は次はもう少し離れた状態で見上げた方がいいたろうなと思った。

「……………お名前は?」

その問いに対して口を開きかけた青年に、少女は軽く手を上げてそれを制した。

「あ、何が起こるかわからないので、本名じゃない方がいいでしょう。私は力ナリア。高校生です。最近十七歳になりました。ここには気が付いたらいて、何故だか魔王の力を持っていました。初めま

して」

そう言って、少女、もとい、カナリアは頭を下げる。

本名を名乗らなかったのは、これから確実に厄介事に巻き込まれるであろうことを想定してである。

少々自己紹介としては突拍子もない物ではあったが、本人は伝われば良いと思っているため、気にしない。

「ええと……僕はアオイです。サラリーマンやってます。二十二です。僕も気が付いたらここにいて……何故かこの世界に関する知識があります。こちらこそ、初めまして」

青年ことアオイも、カナリアの意図を理解したのか、似たような自己紹介を済ませる。

「アオイさんですね。これから、多分、確実に、厄介な事に巻き込まれると思いますが、よろしくお願いします」

「多分確実につてなんですか……でも、それは僕も思います。こちらこそよろしくお願いします」

カナリアの言い回しに苦笑するアオイを見上げながら、カナリアは別のことを考えていた。

——まさか、こんなところで出会うとはね。

こうして、一人の青年と一人の少女は、この世界で出会った。

■二話・少女（後書き）

どうやら、カナリアちゃんはアオイ君のことを知っているようです。
何故知っているのかは、後日語られると思います。

それにしてもアオイ君はヘタレであった。
そしてカナリアちゃんが勇ましい。

2 / 1 5 誤って削除してしまったため、上げ直しました。

■三話・青年と少女（前書き）

皆さんお久しぶりです。

そして受験明けの開放感。もう十日以上経ってるけど。
俺は受験生をやめるぞシヨ ●ヨーーーーー!!!!!!

あ、ちゃんと志望校は合格しましたよ？

■三話・青年と少女

side out

「ところで、この世界の知識があるとおっしゃいましたが、これからどこへ行けばいいかわかりますか？」

木陰から通学鞆を取ってきたカナリアの問いに、アオイは頷く。

「ええ。この森を抜けるとお城があるので、一先ずそこに行こうと思っただんですが……」

そこまで言って、アオイは困惑したような表情を浮かべた。

その様子に、カナリアは表情を変えないまま首を傾^{かし}げる。

「どうされました？」

「方向がわからなくなっちゃってしまっただけ」

「……ああ」

おそらく、いやもしかしなくても、先程の戦闘のせいだろう。

強大な魔王の力を有するカナリアとは違い、戦闘能力で言えばアオイは普通の人間となんら変わらない。

先程のように突然命の危機にさらされて、冷静でいられる方がおか

しいだろう。

「それは困りましたね」

困りましたね、と口で言いながらも、カナリアの表情には困惑らしき物は見られない。

もしかしたらこの少女は、あまり表情が表面に現れないタイプなのかもしれない。

「太陽が見えれば方角がわかるのでしょーけど」

木々の隙間から見える空は茜色に染まっている。

これが夕焼けによるものであるのなら、太陽は現在西の方向に見えるはずである。

だが、生茂った木々の合間からは、太陽の姿は伺えない。

「あ、いえ、ここからじゃ太陽は見えないんですよ」

「そーなんですか？」

予想外の返答に、カナリアはアオイを見上げて目を瞬いた。

「ええ。ここ魔族領……一般的な呼び方は魔界ですが、ここは外界とほぼ完璧に遮断されていて、太陽の光も遮られて僅かしか入って来ないんです。だからここは昼でも夕焼けみたいな空ですし、太陽も見えません」

太陽光線が大気中を通過する際、夕方は昼間に比べ通過する大気の種類が厚くなるため、波長の短い青い光は大気を構成する分子によっ

て散乱吸収させられ、波長の長い赤い光の方が多く届く。
これだけだと説明がつかないが、夕焼けが赤い理由は概ねおおむねそういうことである。

ここの空が赤い理由もどうやら似たような理由らしく、大気の層でこそないものの、つまりは太陽光に含まれる青い光を散乱吸収あるいは遮る物があると。

それだけではまだいろいろと謎は残るが、それはここが異世界であるため、地球とは世界の作りが違うということで納得してもらおう。

「それは……うーん、一体どう手を打てばいいのやら。と言うか、外界と言うとやっぱり人間界ということになりますか」

「まあ大雑把に言えばそうですが、魔界、人間界、と言っても、単にお互いの領土をそう呼び合っているだけで別世界というわけではありませんし、この世界にも未開拓的な場所があるので、魔族領土以外が人間の領土かって訊かれれば、厳密に言えば違いますね」

「なるほど。ちなみに何で遮断されているんですか？」

「結界ですね。それも、かなり強力な」

「張ったのは誰ですか？」

「それはちょっと……わからないです。すみません」

どうやら、アオイはこの世界に関する知識があると言っても、この世界の生態系や地理的な知識ばかりで、歴史や一般常識といったものが一部を除いて全くと言っていい程ないらしい。

「……そうなんですか。すみません、お気になさらず。今はそんなことより、どうやって目的地への方向を割り出す考えましょう」

「そうですね……でも、太陽が見えないことにはどうすれば……」

ふと、困ったように呟いたアオイの表情が変わる。

その様子に、カナリアは相変わらずの無表情のまま怪訝そうにアオイを見つめた。

「どうかしましたか？」

「ありました。この状況で方角がわかる方法が」

「！ 本当ですか」

思いがけないアオイの言葉に、カナリアが驚きに目を見開く。

それは今まで終始無表情だったカナリアの、アオイが初めて見た表情だった。

「本当ですよ。何も太陽の位置を知るのに、太陽そのものを探す必要はなかった。見るのは空^{うえ}じゃなくて、地面^{した}です」

そう言つて、アオイは足下を指差す。

そこにあるのは、二人と木々達の――

「なるほど、影ですか」

「ええ。いくら太陽が見えないと言っても、光が全く入って来ないわけじゃないので、影ぐらいできるでしょう」

「ですが、時間がわからないのでは？そもそも時間がわかってても、早朝、正午、夕方でもなければあまり正確には測れませんし……」

「そこでこれを使います」

アオイは左手首に着けてあるそれを外し、カナリアに見えるようにかかげた。

「……時計、ですか」

「ええ。アナログの時計であることがポイントです」

言いながら、アオイは足下の影と時計を交互に見比べ、時計を水平に回して丁寧に向きを確認する。

ちなみに、大学時代から愛用しているブランド物の時計である。

「まず、時計の短針を太陽の方向に合わせます。この場合太陽は見えないので、影の方向から太陽の位置を確認します。次に、文字盤の数字の十二の位置を確認します。そうすると、短針と十二時の数字の丁度真ん中の方向が南になります」

「なるほど、初めて知りました」

「ただ、この方法を行う際の大前提としては、時計がちゃんと合っている物だということです。僕がここへ来る直前、元の世界では深夜近くでした。なのにこの世界では日が出ている」

「……なら、この方法は使えないのでは」

「ええ、通常なら。ですがこの時計、僕にはとても深夜を指しているようには見えません」

アオイにそう言われてカナリアが時計を覗き込むと、確かにその短針は深夜を指してはいなかった。

時計の針は、五時を過ぎたあたりを指し示している。

「僕の時計が狂っているということでしたら、それまでです。ですからこれは賭けです。僕の時計が、偶然か必然かこの世界に順応したということへの。この世界の一日が、二十四時間だということは知っているのです」

そこまで言って、アオイはふうと息をつく、困ったような笑みを浮かべた。

「まあ、そんな都合のいいことがそう簡単に起こると思えませんので、あんまり信用しない方がいいのでしょうかね」

そんなアオイを見つめて、カナリアは考えるような仕草をする。

この青年は、困ったような表情がよく似合う。

本人は似合ったところで嬉しくもなともないだろうが。

「信じますよ。他に方法ありませんし」

「えっ、でも、本当に割に合わない賭けですよ？」

「いいですよ。賭けというものはそもそもそんなものです。それに、もしこの森で一晩明かすことになっても、魔王の力があれば危険はありませんよ」

この少女は、元から多少のことでは動じない性格なのだろうか。

異世界に飛ばされたことも、突然強大な力を手にしたことも、すんなり受け入れてしまっているように見える。

というか、彼女は本当についさつき出会ったばかりの人間と（それも異性の大人の大人と）、野外で一晩明かすつもりなのだろうか。

仮にも一社会人のアオイとしては、それはいささか躊躇われる事態である。

「それは……有難いですが。カナリアさんはそれでいいんですか？」

「構いませんよ。まあ、確かにそうそう都合のいいことが起こると思えませんが、全く起こらないとも言えませんか」

アオイが若干詰まりながら訊くと、カナリアは質問の意図を理解していないのか、若干ズレた答えを返してきた。

「いえ、そうじゃなくて……貴女あなたみたいな華の女子高生が、僕みたいなついさつき会ったばかりのどこの誰とも知らない男と野宿なんかするのは、あまり褒められたことじゃないと思います」

声と表情に若干渋さを滲ませて言うアオイに、カナリアは無表情の

まま目を少しだけ見開いた。

「はあ……？」

きょとんとしたように目を瞬き、「華の……？」と考えるように小声で呟く。

どうも、アオイのコメントに対する着眼点がどこかおかしいようだ。

「そうですよ！華があると言わずしてなんと言うんですか！カナリアさんは可愛らしい方ですし、もっと用心しないと駄目ですよ」

「かわ……」

アオイもカナリアに負けず劣らず、相手のコメントに対する着眼点がおかしい。

もしかしたら、二人して案外天然なのかもしれない。

「まあ……私に華があるかはともかく、そう思ってくださいるのでしたら、なおのこと先に進んだ方がいいのでは？」

カナリアは「そんなん言われたの初めてです（よくまあ恥ずかしげもなく言える的な意味で）」という言葉に辛うじて飲み込む。

一応容姿を褒められたことには変わりはないのだ。嬉しいと言えば嬉しい。

例えばそれが、ストレート過ぎる程ストレートな言葉だったとしても、例えばそれが、妙に場違いな状況で言われたのだとしても。

「あ、そうですね……でも、もし間違ってたなら……」

「その時はその時です。方角はどちらですか？」

「ええと、僕が森に入った地点から南西に真つ直ぐ進むとお城に辿り着くんですが……」

「この森に入ってから真つ直ぐ進んでましたか？」

「ええ、多分」

「では、南西に進んでみましょうか」

「そうですね」

二人は再度時計で方角を確認し、森の奥にあるらしい城を目指して歩き始めた。

「……大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「いえ、でも」

「大丈夫です」

「無理はなさらない方が」

「いえ、大丈夫です」

「そうは言われましても」

「大丈夫です」

「大丈夫そうには見えないんですが」

「大丈夫ですから」

「いや、アオイさんさつきから「大丈夫です」しか言っていないじゃないですか」

歩き始めてから数十分。

魔王の力を得たことによって体力がほぼ無尽蔵と化したカナリアと違い、肉体的には一般人となんら変わりのないアオイは、完全にバテていた。

そもそもアオイは残業明け。
それも元の世界の時間は深夜近くだったのだ。

立て続けに突拍子のない事態に見舞われ、さすがに体力も限界に近い。

「本当に大丈夫ですから。とにかく先に進まない」と

カナリアは幾度となく休憩を申し出てはいるのだが、アオイはカナリアを野宿させたくないのか、何が何でも日が落ちる前に目的地に着かねばと、頑として休憩を拒み続けている。

変に頑固な人だ、と、カナリアもさすがに困り始めていた。

今のアオイははっきり言って顔色も悪いし、少し前から若干目付きまでどこかおかしくなってきたている。

はっきり言って、目が死んでいる。

魔王の力で回復させられないかとも考えたのだが、どうやら怪我の治療はできても、体力の回復まではできないようだ。

「そうは言われましても、こんなところで倒れられても大変でしょうに。私の力じゃ体力まで回復はできないんですから」

いつそ強制的に昏倒させてしまおうか、と危険なことも考えたが、それでは本末転倒であるため辛うじて思い止まった。

「……そこまで休みたくないのでしたら、担いでも歩くのをやめてもらいましょうか」

両腕をメキメキと獣のように変形させて、じりっ、とカナリアがアオイに近付く。

その姿はまさに獲物を狙う鷹。捕食者そのものである。

「えっ！？いや、その、さすがにそれは」

有無を言わせないカナリアの行動に、アオイは目に見えて狼狽する。
しかしカナリアは容赦しない。

「なら選びなさい。倒れる前に休憩するか、私に目的地まで担がれるか」

「目的地までなんですか！？それは一成人男性としてちょっと！」

「ちなみにどちらも選べないと抵抗された場合、もれなく強制的な昏倒をセットで現地までお姫様抱っこでお届け致します」

「そんな視聴者プレゼントみたいな言い方されても！」

そんな漫才のようなやり取りを繰り返しながらも、状況はまさに一指触発。

カナリアが狩るか、アオイが狩られるか。

……いや、どちらも同じか。

そもそも、アオイがカナリアに全力で抵抗したところで、勝算は一ミクロン程も存在しない。

カナリアが一步近付き、アオイが一步引く。

さらに距離を詰めようと踏み出しかけた時、カナリアがハツとしたようにアオイから視線を離れた。

突然の反応に、アオイもつられてカナリアの視線の先を追う。

聞こえてくるのは、馬の蹄つひの音だろうか。

変形させた両腕はそのままに、カナリアが警戒を含んだ視線を投げかける。

程なくして、木々の陰から、一頭の馬が躍り出た。

純白の毛並みに、董色たてがみの鬣と瞳。

その身体からだは何やら魔術的な紋様で隈取くまどられており、ただの馬ではないことなど一目でわかる。

「……………地獄オロバスの賢者」

意識せず、その言葉は極自然にアオイの口から零れ落ちた。

名を呼ばれた馬は、二人の目の前で一瞬で一人の青年へと姿を変え

た。

そしてその青年は、その場で優雅に一礼する。

「お待ちしておりました、魔王様方」

■三話・青年と少女（後書き）

作者はアオイ君みたいに頭よくないんだよお!!

（訳：アオイ君を活躍させるにはどうしたらいいの）

時計で方角を測るやり方は実際使えるので、試してみてください。
アオイ君の見せ場を作りたくてわざわざググりました。

あれ……見せ場、作りたかったんだよね？

何故か例によってまたもやヘタレに。

■ 四話・昔話

「えー、これは今から八万年程前のお話です。

当時、この世界には人間領と魔族領を分け隔てる結界などなく、それぞれが自主的に住み分けて暮らしていました。

時折魔族が人里に下りて来て悪さをしたり、人間が魔族を召喚して悪事を行ったり、お互いあまりいい印象は抱いていなかったのですよね。

人間と魔族は決して馴れ合うことはしませんでした。かと言って真っ向から対立しているわけでもありませんでした。

何故なら、魔族は統一されていなかったからです。

当時から魔王という者は存在しましたが、それは単に魔族としての力の強さを示す位のようなもので、別に魔族の王というわけではありませんでした。

人間と魔族は相容れない種族でしたが、魔族は別段軍を率いて人間達を侵略することもなく、そのため人間も魔族をそれ程重大な脅威とは捉えていませんでした。

人間側が魔族を殲滅しようとしなかったのはそのためです。

ただ強いて言うのなら、人間側では裏で召喚した魔族を後ろ盾に不正を働いている貴族や権力者もいたようで、そういった人達の圧力により、あまり魔族討伐に積極的に乗り出せなかったというのが、少なからずあるのでしょうかね。

しかし、人間側としても、あまりにも魔族による被害が大きくなれば討伐隊が派遣されたり、少々目に余る行動をする魔王が現れたりすると、勇者を差し向けて倒させたりしていたようです。

そうやって、お互いを牽制けんせいしたり共依存したりする形で、上手くバランスを取っていたようですね。

そんな中、魔族の中からそのバランスを崩さんとする者が現れました。

魔王シオン。

それがその者の名前です。

魔王シオンは、力づくで魔族の領土を全て自分の物にしようと企みました。

魔王と名の付くだけのことはあり、シオンの力はとても強大で、魔族達は瞬く間に彼の配下となっていきました。

抵抗する者は、容赦なく殺されました。

魔族の侵略は順調に進んでいき、気をよくした魔王シオンは、人間達の領土にまで手を伸ばし始めました。

言うなれば世界征服です。

魔王の典型的な例ですね。

非常にわかりやすいです。

さて、魔族の中に、とある一人の魔王がいました。

シオンとは別の魔王です。

その魔王は一風変わった魔王で、強大な力を持っていながらも、争いを好まない平和主義者な魔王でした。

彼はお気に入りを使い魔を連れてこつそり人間の街に下りてきては、街の人と交流を深めたり、時には人助けをしたり、暇な時は城の庭で趣味の家庭菜園に勤しむような、そんな魔王でした。

彼の名前はエミリオ。

彼は、世界の現状に非常に憂えて、シオンを止めるべく立ち上がりました。

とはいえ、相手は魔族をほぼ制圧してしまう程の実力の持ち主。

エミリオは使い魔や臣下達と共に応戦しましたが、そう簡単に太刀打ちできるわけではありません。

そこでエミリオは、親友でもある勇者に援けを求めました。

この勇者は、以前別の魔王を討伐に向かった際誤ってエミリオの城に迷い込み、そこで彼の人柄に触れ、敵対せず交友を深める道を選んだのでした。

さらにエミリオは異世界の友人にも救援を要請。

結界が張られる前は、異世界への敷居は案外低かったようです。

もともと、魔王レベルの実力の持ち主でもなければ、異世界への道を開くことは不可能でしたが。

ちなみに呼ばれたのは、龍王でもある水神と、閻魔大王。

世界観ぶち壊しにも程があるかもしれませんが、我慢しましょう。

水神、^和魔王、^洋閻魔と揃ったのは奇跡かもしれませんね。

……さて、それはともかく。

戦いはまさに熾烈を極めました。

多くの魔族が、傷付き、倒れました。

しかし、全てのものには必ず終わりが訪れるものです。

それは後に『紫紅の戦い』と名付けられた戦いが始まってから、約一年経った頃でした。

一年と言うと長く感じるかもしれませんが、長命の魔族にとって一年はあつと言う間ですし、そもそも戦争というものは、何年もかけてするものです。

元々エミリオの魔力は、充分強大過ぎる程強大でした。

本来、魔王でありながらあんな平和的な生活をするなど、到底無理な話なのです。

魔族領はあまり治安もよくありませんし、人間の討伐隊や勇者もやって来ますから。

エミリオは、そんな降りかかる厄災をその強大な力によって無理矢理退け、せめて日常だけでも平和にと暮らしていたのでした。

一対一なら、実力はエミリオの方が若干勝^{まさ}つたのです。

それでも一年という時間を要したのは、魔族のほとんどを制圧したシオンの手勢があまりにも多かったことと、エミリオが必要以上に犠牲を出すことを好まず、なんとも手間のかかる戦い方をしたためでした。

二人の魔王は全力で戦い合いました。

それはもう凄まじい戦いでした。

何せ、魔王同士の戦いです。

大地は裂け、山は割れ、雲は吹き飛びました。

そしてお互いボロボロになりながら、ついに、エミリオがシオンに止めを刺しました。

彼と、彼の仲間達の健闘により、魔王シオンによる脅威は阻止されました。

普通の物語なら、これでハッピーエンドですよね。

ですが、そう上手くいかないのが現実なのです。

シオンによって、以前と違い統率の取れるようになっていた魔族達は、シオンを倒したエミリオを、「彼こそが魔族の王に相応しい」と、エミリオを担ぎ上げました。

さらに言うと、エミリオはシオンに止めを刺した時、どういったわけか魔王シオンの持ち得る魔力を、全て吸収してしまったのです。

そうして、エミリオは実力においても、名声においても、真の意味での魔王となりました。

それは、人間と魔族が戦争を起こす理由を作ったということでした。先程も言った通り、人間と魔族が真っ向から対立していなかったのは、魔族が統一されていなかったからです。

しかし魔族は、エミリオという王を得てしまいました。

これには、人間達も黙ってはいないでしょうね。

魔族の中にも、人間を制圧せよ！と言う者が出てくるでしょう。

そこでエミリオは真の魔王として得た力を使い、魔族の領土を囲むように強力な結界を張りました。

そして、人間と魔族の、お互いの領土への行き来が出来ないようにしました。

“魔界”と“人間界”の誕生です。

結界を張ったため、エミリオは親友である勇者にも会うことができなくなり、さらに結界の効力で、異世界の友人達とも会うことができなくなりました。

エミリオは、魔王として成すべきことを成すべく、閉じられた魔界で動き始めました。

……彼はこの時、何を思っていたのでしょね。

彼は人間との交流を望み、他の誰よりも平和を愛していましたから。そして、周りにいる臣下や仲間がいなくなったり、また増えたり、いろいろなことがありながらも八万年が経ちました。

今までの魔王レベルの実力の持ち主は、五千年も生きれば大往生です。

それを、エミリオは真の魔王になったことにより、八万年も生き延びたのです。

とは言え、さすがに彼は生き過ぎました。

時が経つに連れ肉体は衰え、今まで通り満足に動くことができなくなり、一日の行動時間も減っていきました。

このままでは、魔王としての務めに支障をきたすのでは。

臣下達が皆一様にそう思い始めた頃、エミリオは長年連れ添った宰相を呼びつけて、こう言いました。

自分は今もう魔王を降りなければならない。

千年後に後継者が現れるはずだから、それまで魔界を頼む。

と。

宰相は少なからず驚きました。

そして自分の主君に理由を問いたしました。

しかし彼は、理由を語らず、唯々謝罪と自分の無力さに対する自責の念を口にするだけでした。

魔王自肅の噂は、瞬く間に魔界中に広まりました。

多くの者が驚き、戸惑う中、エミリオは魔王の仕事の引継ぎを宰相に頼むと、八万年連れ添ったお気に入りを使い魔を連れて、魔界の外れにある洞へ向かいました。

そこで彼は使い魔を一つの棺に変えると、魔界を囲む結界の維持のため、眠りにつきました。

そして、彼の言った千年の時間が経ちました」

■ 四話・昔話（後書き）

今回は昔話のみです。

なんか昔話というより歴史の授業みたくなってしまった（汗）
ごめんなさい。

誰が喋ってるのかは次回でわかります（多分）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844p/>

花と小鳥と半分の魔王

2011年2月19日13時17分発行